

# 南十字星

大阪大学外国語学部  
(旧大阪外国語大学)  
インドネシア語同窓会

## 2018年秋 第25号



### <目次>

- |  |   |
|--|---|
| 2~3 伊勢崎昭弘(03 卒) 社会人生活 15 年を経て  | 12 佐伯和夫(73 卒)<br>ツアーガイドを目指して                            |
| 4 岸田勝昭(67 卒) 中西龍雄先生を偲んで  | 13 須田和(79 卒)<br>外語女子 ~再会と新しい出会いと~                       |
| 5 横山オリエ(99 卒) テキサス州ヒューストンに滞在して   | 14 Dwi Puspitosari (留学生)<br>Bahasa, Passport Kasat Mata |
| 6~7 菅原由美 (教員) キャンパス便り  | 15 辻本雅洋 (75 卒) 関東支部総会<br>会員からのひとこと                      |
| 8~9 Dr. I Wayan Pastika (教員)<br>Semangat Belajar Mahasiswa<br>Program Studi Bahasa Indonesia | 16 協賛金・会長報告・総会案内・会計報告                                   |
| 10 小川秀洋(75 卒) 大学卒業後のインドネシアとの係り   |   |
| 11 佐々木信子(67 卒) インドネシアと私  |   |

## 社会人生活 15 年を経て

伊勢崎 昭弘 (2003 年卒)

「南十字星」に寄稿するのは今回が 2 回目となります。つい先日寄稿したばかりと書いていましたが、前回は 2007 年春号でしたので既に 10 年以上の月日が流れていたのですね。当時と同じ会社の同じ部署で当時と同じ様に東南アジアを中心に港湾コンテナクレーンの営業をしています。あの頃と変わった事があるとすれば、経験も積んで任される責任も大きくなり、そして現地側と密着した営業活動を展開すべく現地入りする頻度が更に増えた事くらいでしょうか。かつてとは異なり航空券も安くなって、買い方と時期にもよりますが、東京と Jakarta は 4-5 万円程度で往復できてしまうので、尚更頻繁に現地往訪する事が容易になっています。むしろ機内で作業している間に PC や携帯端末の電源が無くなる様にエコノミークラスでもしっかり電源が装備されている飛行機を選ぶ事の重要性が増していますが、ゆっくり航空券を探している暇も無いので時々痛い目に遭う事になります。



すが)。前回寄稿時から変わった事をもう 1 つ挙げるとすれば、ようやく Indonesia での仕事が増えてきた事でしょうか。Indonesia も新政権になってから海運を含めたインフラ整備が本格化し、当社も自分が長年失敗を続けてきた Indonesia に於いてもようやく案件が受注できる様になり、2013 年以降 Jakarta

の Tanjung Priok Port や Surabaya の Tanjung Perak Port に多数のクレーンを納入してきました、現在も Tanjung Priok Port に加え、Medan の Belawan Port でも複数の案件を受注している為、毎月 Padang 料理を満喫しています（これもインターネットと携帯電話の発達で、Indonesia にいても他の仕事ができる様になってしまい、毎日各 30 分程度の昼食と夕食が出張中の唯一の楽しみです）。また会社としても 2017 年 8 月、Batam 島に新工場を設立し、自分もその設立の為に当時駐在していた Singapore から足繁く Batam 島へフェリーで通っていました。今後も更に Indonesia での活動を拡大すべく、Indonesia で仕事を受注し、そのクレーンを Batam 島で製作して納入したいものです。



市場が活況な事もあり Vietnam へ行く機会がとて多い日々です。当時から現地語を習得したいと思いつつ、難易度の高い言語という事と自分の怠慢さが災いして全く身に付いていません。Vietnam からそのまま Indonesia へ移動すると言語的なストレスも一気に無くなり、1 ルピアでも多く運賃をもち取ってやろうと鼻息の荒いタクシー運転手を適当にかわしながら空港からホテルへ向かっていると何か安心する部分すらあります（これも Grab 等の登場で体験できなくなりつつありま

話は変わりますが、昨年は自分も在籍していた母校(西東京・東海大菅生高)の野球部が夏の甲子園準決勝まで勝ち進み、準決勝は昼食時間を延長して Vietnam/Hai Phong の建設現場近くの地元食堂でインターネットにて応援していました。母校はまだ歴史の浅い高校で、自分の代が 13 期生、在学中の 1996 年夏と 1997 年春にそれぞれ甲子園出場を果たしましたが、どちらもそれが初出場でした。その後も何度か甲子園出場を果たしましたがなかなか勝ち進めず、2016 年までは 3 年連続西東京大会決勝戦敗退という結果でした。2017 年夏は甲子園準決勝で敗退してしまいましたが、彼らが甲子園で戦う姿を観ていると、自分がまだ高校生だった頃を思い出し、あの頃は本当に毎日死にもの狂いで練習に明け暮れていたものだなあ、と懐かしくなりました。社会人になり時々徹夜で仕事しても余り苦にならないのは、当時の日々の方がよほど厳しかった事に他ならず、今となっては本当に貴重な経験だったと改めて感じています。



私生活の中で大きな変化は、現在は既に日本へ帰国していますが、2015年春から2017年春までの約3年間、Singaporeに駐在した事でしょうか、但し業務の都合でほぼ毎週VietnamかIndonesiaへ出張していたので個人的にはSingapore駐在員だったという自覚が余りありません。世界屈指の規模を誇るコンテナターミナルを有するSingaporeに於いて、まさにそのコンテナターミナルの真裏に住まいを構えて生活した事は色々な意味で刺激的でした。2004年に初めてSingaporeの客先と会話をした時は、客先が話すSinglishが全く理解できず苦労しましたが、今となってはむしろ心地良いものにすら感じます(いまだにハリウッド映画の英語は全く理解できませんが)。



時々通勤電車の中や帰国するフライトの中で、ふと仕事の手を休め、これまでの自分の人生

を振り返るとつくづく家族の為に何もしてやれていない男だなぁ、と言う事を痛感します。開き直れば自分は元々コンテナクレーンを売る為に生まれてきた訳ではないし、1つの会社人生に固執する事無く色々な事に挑戦する事も必要なのではないか、また仮にこのまま続けて定年を迎えた時に自分のサラリーマン人生を振り返ってどう思うのだろうか、等といった事を考えるのです。まだ自分が学生だった頃や社会人に成りたての頃にバックパックを背負って世界中を旅していた頃、旅先で会う欧米人の中には転職を機に自分の人生を見つめ直す、と言って旅行していたトラベラーが多くいた事を思い出します。欧米人はもっと若い頃に人生設計を真剣に考えて、適宜それを修正しながら生きているのだなぁ、と言う印象を受けました。一方で当時の自分は目先の事しか考えておらず、夜は酒を飲んで楽しく帰ればそれで良い、と言ったものでした(今も大して変わりませんが)。

振り返れば自分の就職活動もいい加減なもので、2002年春にUniversitas Indonesiaへの留学を終えて帰国し、東京の実家で数日過ごした後、さあ就職活動をするぞと思立ってリクナビに登録した頃にはほとんどの企業が募集を締め切っていました。まだ募集が終わっていない企業を中心に、できれば海外とも仕事をしている企業に就職したいと少ない選択肢を模索した訳です。その様な中、現在勤めている企業は当時既に募集は終了していましたが、ダメ元で人事部へ直接電子メールを送信し、無理やり試験と面接にこぎ着けました、試してみるものです。就職後、当時の人事担当者から「今だから言うけど君が就職面接で着ていたスーツはリクルートスーツじゃなかったよね」と笑われたものです。

就職して15年が経ち、当時は海外で仕事をしたいと切望していた事が割と早い時期に達成され、今となっては日本にいても東南アジアにいても何が海外と考える様な事は無くなり、むしろ如何に仕事をこなしていくの方が常に頭の中にあり、時々余裕ができるとせっかくIndonesiaやVietnamを往訪する機会があるのに全くその国の事に関心を持っていない事を残念に思ったりします。かつては空港バス・DAMRIやMetro Mini/Kopajaと言った路線バスの車窓から(窓ガラスが無い事も多々ありますが)じっくり見つめていたJakartaの街並みも最近は見ると余裕が無くなり、時々外を見てここにこんな建物が建ったのか、と驚く事があります。またゆっくりとその国の文化や街並みを堪能したいと思いつつ、一方でこのまま日本企業で必死になって働くのも悪くないな、と思う日々です。

時が経つのは早いもので、これまでとはとにかく案件を受注する為に全力を注いできましたが、これからはそれに加えて管理職側の業務もこなしていく事になります。これまで以上にもっと多角的な視野を持って世の中を見て行かなければ、最近の中国メーカーとの価格競争を考慮すると10年後に生き残れていないかも知れません。そうした思いを持ってまたIndonesiaという国と向き合っていきたいと考えています。

- 添付写真： 1) Indonesia Tanjung Priok Port 向け岸壁コンテナクレーン  
2) Vietnam Ho Chi Minh City 向けヤードトランスファークレーン  
3) Singapore 駐在終了間近に往訪した West Papua の Raja Ampat

## 中西龍雄先生を偲んで

岸田 勝昭 (1967年卒)

外大卒業後の私は、3つの会社で、20代からやりがいのある国際ビジネスを経験させて頂きました。海外に通算13年駐在、海外出張先約45カ国という経験でした。

《学生時代 1963～1967年》：

スカルノ大統領の親PKI路線、1965年9月30日クーデター後の失脚、1968年3月スハルト大統領就任までインドネシアの政治・経済の混乱期でした。

1966年は総合商社からインドネシア語指定の求人が来ない最悪の年でした。中西龍雄主任教授の推薦状で、損保業界2位の大正海上火災保険（その後三井海上に社名変更、現三井住友海上）の試験を受け合格。

《大正海上時代 1967～1971年》：

輸出入貨物の海上保険部門配属。

1969年、中西先生から、「外大研究室に帰らないか」という予想だにしない突然の要請。更に1971年夏先生から、「日商岩井（現双日）が、即戦力のインドネシア語が出来る実務経験者を求めているので、受けてみないか」というスカウト話。迷いましたが、大阪でインドネシア語 ⇄ 日本語両方の筆記試験、数日後東京で重役面接を受け、合格。後日中西先生に「インドネシア語の試験にはまいりました。」と言うと、「いや実は、人事部から頼まれて、僕がテスト問題を作成したんだ。」とすました顔。

《総合商社 日商岩井時代 1971～1991年》：

1971年9月、大阪本社鉄鋼貿易部配属。タンゲランに建設予定の日伊合弁プロジェクト PT IWWI (Iron Wire Works Indonesia) の主担当に任命され、2ヵ月後、28歳独身でジャカルタ事務所着任。IWWIは筆頭株主 日商岩井、華人資本 PT Respati Djaja、東大阪の春日鋼業の3社合弁会社。1972年会社を順調に立ち上げました。

1973年、大阪本社出張時、中西先生のご自宅を訪問して原書を寄贈。その時先生は、執筆途中の辞書の膨大な原稿を見せて下さいました。

1974年1月14～17日 田中角栄首相 ジャカルタ公式訪問時、反日暴動 Malapetaka Limabelas Januari が発生。



1974年秋、大阪鉄鋼貿易部に転勤。インドネシアの貧しい若者達を IWWI で採用して一から育成し、貢献できたことに喜びを感じました。PT IWWI はその後も順調に業容拡大し、今では、東南アジア No.1 の Wire Maker に成長、自動車産業等の発展に貢献しています。

その後1974～1991年の間、大阪、ロンドン、サンフランシスコ、ロサンゼルス支店勤務。

1991年大阪に帰国後、明石海峡大橋で有名な神鋼鋼線工業（東証二部上場会社）に出向、2年後、トップの要請で役員として転籍。63歳で退職。

振り返れば、在職中多くの国の異文化に接して見聞を深めることが出来ました。

中西先生は、1994年8月に他界されました。種々お世話下さった先生に感謝申し上げますと共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

退職後は2010年大学院修了。中小企業海外展開支援、外大グリークラブ OB 合唱団、学会活動等を楽しんでいます。今後の夢は、シニア世代にインドネシア語を教えることです。現在74歳。まだまだ休めません。



1972年 PT IWWI の同僚・川崎汽船からの来訪者らと [左端が筆者]



## テキサス州ヒューストン に滞在して

横山 オリエ (1999年卒)

大学卒業後、インドネシアには全く縁のない生活をしてきました。ここでは子どもたちを連れて夫の海外出張に同伴した経験を紹介させていただきたいと思います。

2014年10月から半年間、米国テキサス州ヒューストンに滞在しました。ヒューストンは石油産業のみならず、がん研究などの先端医療などの産業も盛んな全米第4の都市であり、人種の多様性はロサンゼルスを超えています。まさにコスモポリタンです。ここで、南米や欧州、アフリカ、中東、アジア等様々な人に出会いました。

長男が3年生、長女と次男が幼稚園でした。子どもたちの英語は挨拶程度です。地元の小学校への入学に当たり大変だったのは予防接種(10種類の接種が必要)でした。3人分が約30万円という驚きの値段でしたが、友人が無料のシステムを探してくれ、それを利用することにしました。予防接種バスが地域の学校を回るのですが、かなり治安の悪い地域にあり恐怖でした。米国は通りを一つ越えると景色が一変することがあります。家、車、体型が変わります。家の壁はひび割れ、車の色があせ、極端に太った子どもたちが増えます。格差社会の一端を見せつけられました。

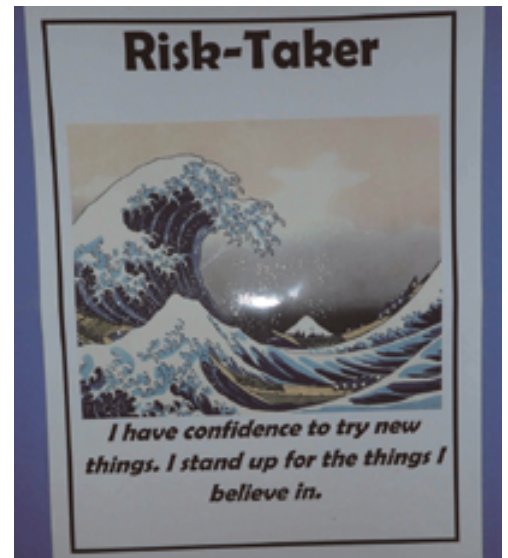
長男が一番心配でしたが、彼は飄々としていました。陽気なアルゼンチン人のお友だちがいつも一緒にいてくれたお陰で楽しく過ごせました。反してお喋り好きの娘は言葉の壁に苦しみました。毎朝休みたいと泣く娘を送り出すのは辛いことでしたが、3ヶ月を過ぎた頃から英語が出てきて、友だちも増え、誕生日パーティーに呼ばれる程になりました。パーティーはクラス全員を招待、会場を貸し切るというスケールです。その派手さには驚かされました。次男は幼稚園の空きがなく自宅待機。長男のクラスのマスコットの存在となり、アニメから学んだ英語を実践し、みるみる上達していきました。

小学校で感銘を受けたことの一つが校訓でした。日本の小学校であれば「仲良く、明るく」でしょうか。We are risk-takers その方針通り、間違ってもしっかりと受け止めて励ましてくれました。Fund raising も日本では珍しい物の一つでした。毎月 math night, bingo night, などの催し物があり、その収益が寄付されます。また年に一度、保護者向けのオークションパーティが行われます。この年のドレスコードは Western、先生も保護者も着飾ってきます。生徒の作品や旅行券、宝

石類、そして高値がつく学校の玄関前の駐車場を1年間使用できる権利(この年はなんと5,000

ドル!)などがオークションにかけられ、一晩で120,000ドルもの金額が集められます。それらの収益金は図書館の本、各クラスのiPad購入等々に活用されます。この滞在中子どもたちが英語を話せるようになったのはもちろん、世界には色んな人がいて色んな考え方があることを学び貴重な経験になりました。

「国際化という言葉を使っているのは日本だけだ」という話を聞きますが、この滞在中で身をもって感じたことは他の多くの国で既に国際化しているということでした。翻って私の周りとはというと、外語大時代の親友たちは、ニューヨーク駐在、インドネシアから材料を輸入している製紙会社の海外対応の責任者、海外クライアント専門の司法書士など、どっぷりとインターナショナルな環境に身をおいて頑張っています。私も小さいながらも自分のフィールドで頑張っていきたいと思っています。



写真(上): リスクテイカー。学校の壁やTシャツなどに書いてあります。

写真(右): ボランティアで学校の売店の担当。子ども達のお金を使う練習をする大事な場所でもあります。お釣りの計算が難しい子ども。



## キャンパス便り

言語文化研究科 准教授 菅原由美  
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

【2017年度後期】

### 夏休み：CIS とフィールドワーク研修

CIS (カップリングインターンシッププログラム) が、8月20日～9月2日に、インドネシア大学 (事前研修) と PT. Cilegon Fabricators (バンテン州チレゴン、日系企業研修) で行われました。参加者は、インドネシア大学学生4名 (工学部2名、人文学部2名)、阪大学生4名 (工学研究科2名、インドネシア語専攻2名：4年水野愛理さん、2年栗山和也君) でした。

フィールドワーク研修の方は、8月30日～9月14日に、ジョグジャカルタのガジャマダ大学文化学部を受け入れてもらい、1年生11人、2年生4人が、ジャワの文化を学んだり、各自のテーマに関するインタビューを行ったり、忙しい日々を送り、最後にその調査結果をインドネシア語で発表しました。



### スピーチコンテスト：南山大学

11月19日に、第10回南山大学インドネシア語スピーチコンテストが開催され、1年生の山村凌平君と小林真利花さんが出場しました。2人は1年生でしたが、暗唱部門ではなく、スピーチ部門に参加し、夏のジョグジャカルタ研修で経験したことを発表しました。小林さんが3位に入賞しました。

### 三大学合同ゼミ

昨年に引き続き、10月16日に、南山大学名古屋キャンパスで、三大学合同ゼミを開催しました。東京外国語大学、大阪大学、南山大学のインドネシア語を学ぶ学生たちが集まり、インドネシアに関する発表とディスカッションをおこなうもので、今年の共通テーマは宗教で、阪大はイスラム右派と左派の対立について発表しました。総合討論では熱い議論が交わされました。阪大からは2年生が5人、3年生が2人参加しました。

### 語劇祭

11月25～26日に箕面キャンパスで語劇祭が開催され、インドネシア語専攻は25日に“Pak Belalang”という劇を演じました。あらゆることについて記述してあるという本を持っていると嘘ついて国中で有名になった男が、その嘘により今度は絶体絶命のピンチに陥り、最後に泥棒の自首により一命を取りとめ、改心するという教訓を含んだコメディ劇でした。語劇の後に、役者4人がインタビューを受けて、受験生向けにインドネシア語専攻を宣伝してくれました。以下のページに載っています。「私の阪大外国語学部第5回学生座談会」(URL <http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/forexaminee/2018/01/5.html>)



### 箕面市連携講座

2018年2月3日には、箕面市立西南生涯学習センターで、4年生が卒論を市民の前で発表しました。谷美千帆さんが司会 (本人は、GO-JEKなどのシェアライドに関する卒論を書きました) を務め、それから4人が発表しました。順番は以下の通りです。

1. 今川尚子さん「インドネシアのギャングー民主化による多様化」
  2. 松井友里さん「インドネシアのLGBT問題」
  3. 水野愛理さん「多言語社会インドネシアー西ジャワの大学生の言語生活」
  4. 河野風紗「インドネシアにおける糖尿病の現状と対策」
- です。どれも今のインドネシアを知ることができる興味深いテーマで、市民からの質問もたくさん出ていました。

### 卒業論文口頭試問・卒業式

2018年2月6日に、インドネシア語専攻の合同卒論口頭試問が開催されました。12人の学生が発表10分、質疑応答10分の試問を乗り切り、全員合格となりました。1年生から4年生まで、インドネシア語専攻のほぼ全学



生が集まる前での試問は毎年、学生たちにとっての最後で最大の試練です。試問のあとは、千里中央で全学年合同懇親会でした。皆さん、お疲れ様でした。

大阪大学卒業式・大学院学位記授与式は、3月22日に行われ、卒論を提出した12人は無事に卒業しました。



上：卒業論文口頭試問時の1～4年生



上：卒業式後の記念写真

## 【2018年度前期】

### 平成30年度新入生入学

新年度を迎え、4月3日に入学式が執り行われ、12人の新入生がインドネシア語のクラスに入ってきました（インドネシア語専攻11名、日本語専攻1名）。男性3名、女性9名の構成です。今年の1年生はなかなか個性豊かで、わからないことがあったら、すぐに質問する積極的な学生たちです。



前期は、昨年に引き続き、留学生の Dwi Puspitosari さん（愛称：プッチャン）に TA としてお手伝いしてもらっていましたが（1年生と一緒に写真に写っています）、修士の学位を取得し、秋に帰国することになったため、後期は、再度、Tengku Munawar Chalil さん（国際公共政策研究科博士課程2年）に TA をお願いすることになりました。1年生は、4月27日に行われたインドネシア留学生協会大阪奈良支部（PPI-ON）との交流会にも早速参加して、インドネシア人留学生との交流を始めています。今は、夏休みのフィールドワーク研修として、皆でアチェに行く準備中です。

### 平成29年度学部長賞

4月24日に、平成29年度外国語学部学部長賞授与式が行われ、3年生の吉野真輝さんが、昨年の神田外語大学スピーチコンテストでの優秀な成績を讃えられ、表彰されました。インドネシア語専攻からは、初めての受賞です。おめでとうございます。

### 料理会

今年は雨天のため、夏祭りは開催されませんでした。その代わりに、大阪外国語大学記念会館で、料理会を開き、夏祭りで出すはずだったミゴレンの作り方を、パスティカ先生の奥様に教えてもらいました。ミゴレンのほかに、perkedel jagung（とうもろこしのかき揚げ）、サンバル、テンペも付け合わせとして作りました。1年生も招待して、皆で食べました。

### スピーチコンテスト：神田外語大

7月21日に、神田外語大学で、第12回インドネシア語スピーチコンテストが開催され、阪大インドネシア語専攻からは、2年生の石山可恋さんと瀬野加奈子さんが出場しました。石山さんは、ジョグジャカルタでの体験から「おもてなし」とは何かを学んだという話を、瀬野さんは日本の高校生に修学旅行で、マレーシアやシンガポールのように、インドネシアにも来てもらったら、日本人のインドネシア理解が進むのではないかというスピーチをしました。入賞はしませんでした、2人ともよい経験ができたようです。



上：PPI(インドネシア留学生協会)との交流会

《教員の活動・研究から》

## Semangat Belajar Mahasiswa Program Studi Bahasa

Indonesia 特任准教授 Dr. I Wayan Pastika

Dalam tulisan singkat ini diuraikan semangat belajar mahasiswa Program Studi Bahasa Indonesia di Universitas Udayana, Indonesia, dan Universitas Osaka, Jepang. Uraian yang disampaikan di sini bukanlah kajian ilmiah, tetapi hanya pengamatan sepintas berdasarkan pengalaman mengajar selama tiga puluh satu tahun di Universitas Udayana (tahun 1985 – 2016) dan selama tiga semester di Universitas Osaka (tahun 2017 – 2018). Di samping soal semangat belajar para mahasiswa, juga disinggung soal perbedaan jumlah jenis kelamin mahasiswa yang memilih Program Studi itu sebagai tempat belajar.

Di Program Studi Bahasa Indonesia Universitas Udayana, semangat para mahasiswa belajar di tahun-tahun awal sebelum penulisan skripsi biasanya berjalan cukup baik. Mereka rajin datang mengikuti perkuliahan, menyerahkan tugas dan mengikuti ujian, tetapi tidak cukup cepat menyerahkan usulan penelitian skripsi ketika mereka sudah bebas kuliah. Penyebabnya adalah tiga faktor berikut: (1) proses bimbingan dari Pembimbing Akademik. Seorang Pembimbing Akademik ditugasi untuk memantau perkembangan kegiatan akademik mahasiswa termasuk permasalahan yang mereka hadapi, tetapi ini tampaknya tidak berjalan cukup baik. (2) Pemilihan topik penelitian skripsi. Para mahasiswa diharapkan memilih salah topik dari tiga bidang yang ada: Sastra Indonesia, Linguistik Indonesia, dan Filologi Melayu. Dalam kesulitan seperti ini para mahasiswa jarang datang berkomunikasi dengan Pembimbing Akademiknya. (3) Ketersediaan lapangan kerja setelah selesai studi. Ada kejenuhan di pihak mahasiswa karena mereka berpikir bahwa Program Studi Bahasa Indonesia yang mereka

pilih tidak cukup menjanjikan pekerjaan di kemudian hari. Dalam faktor yang ketiga ini, Kementerian Pendidikan (atau universitas) tidak pernah membatasi jumlah penerimaan mahasiswa. Mestinya jumlah mahasiswa yang diterima disesuaikan dengan kemungkinan kebutuhan tenaga kerja. Sebaliknya, universitas selalu berpikir bahwa lebih banyak mahasiswa yang diterima akan lebih baik bagi kondisi keuangan universitas. Permasalahan seperti ini tampaknya juga dihadapi oleh universitas-universitas lain di Indonesia.

Kendala-kendala di atas agak berbeda dengan apa yang terjadi di Program Studi Bahasa dan Masyarakat Indonesia Universitas Osaka, yang



para mahasiswanya menunjukkan semangat belajar yang cukup tinggi sampai akhir studi. Ketiga faktor yang terjadi di Universitas Udayana tampaknya dapat juga diterapkan di Universitas Osaka, namun faktor-faktor itu berpihak lebih baik kepada para mahasiswa Universitas Osaka alih-alih mahasiswa Universitas Udayana. Faktor yang paling kuat menjaga keajegan motivasi para mahasiswa adalah jaminan ketersediaan lapangan kerja setelah tamat belajar. Dalam hal ini, hampir semua mahasiswa atau alumni di Program Studi Bahasa dan Masyarakat Indonesia Universitas Osaka tidak pernah mengeluhkan soal kesulitan mendapatkan pekerjaan. tampaknya tahun-tahun belakangan ini lapangan kerja di Jepang justru tersedia lebih banyak ketimbang keberadaan jumlah alumni yang berusia kerja. Keterbatasan jumlah alumni yang berusia kerja (khususnya untuk sarjana bahasa Indonesia) berkaitan dengan keterbatasan jumlah mahasiswa yang dapat diterima. Di samping itu, jumlah alumni yang berusia pensiun justru bertambah.



Jika semangat belajar di kedua Program Studi tersebut di atas dilihat dari perbedaan jenis kelamin, tampak bahwa baik di Universitas Osaka maupun di Universitas Udayana, semangat belajar mahasiswa wanita lebih bagus ketimbang teman lelakinya. Mengapa hal itu terjadi? Mungkin jawabannya berkaitan dengan faktor kejiwaan dan faktor sosial, misalnya, jiwa dan sikap sosial wanita lebih kuat ketimbang hal yang sama pada lelaki. Ini baru berupa asumsi saja, tidak berdasarkan penelitian sehingga perlu dibuktikan lebih lanjut.

Di samping semangat belajar, jumlah mahasiswa wanita juga lebih banyak yang memilih Program Studi itu alih-alih mahasiswa lelaki. Padahal, jika dilihat dari jumlah penduduk pada rentang usia mahasiswa, jumlah lelaki lebih banyak alih-alih wanita, baik di Indonesia maupun di Jepang. Menurut *Index Mundi*, rentang usia mahasiswa pada penduduk Indonesia berjumlah dua kali lipat lebih banyak daripada penduduk Jepang, yaitu 260.580.739 orang (per Juli 2017). Dari jumlah itu, usia 15 -- 24 tahun adalah: 16.99%(lelaki22.537.842 dan wanita 21.738.210).<sup>1</sup> Sementara itu, jumlah penduduk Jepang sampai Juli 2017 adalah 126.451.398 orang dan dari jumlah itu 9.64% berusia 15 -- 24 tahun dengan lelaki sebanyak 6.417.085 orang dan wanitanya adalah 5.778.904 orang.<sup>2</sup>

Akhirnya, semangat belajar mahasiswa memang harus terus ditingkatkan, begitu juga sumber daya pengajarnya, termasuk unsur-unsur sarana dan prasarana pendukungnya. Namun demikian, hal yang lebih penting dari semua itu adalah universitas harus dijadikan tempat menghasilkan sarjana yang bermutu dan sarjana yang dihasilkan dapat diserap oleh lapangan kerja. Alumni Program Studi Bahasa Indonesia Universitas Udayana (kemungkinan juga alumni



di universitas-universitas lain di Indonesia) menemui banyak kesulitan dalam mencari pekerjaan. Sebaliknya, alumni dari Program Studi serupa di Universitas Osaka (untuk kondisi ekonomi seperti sekarang ini) tidak menemukan banyak kendala. Walaupun harus diakui bahwa lapangan kerja dapat diciptakan oleh setiap orang yang memiliki kecerdasan dan keterampilan tanpa harus bergantung pada pihak lain. Di Indonesia para pejabat tinggi pemerintahan selalu mengatakan hal itu di berbagai kesempatan. Ya, itu memang mudah dikatakan, tetapi sulit dilaksanakan, seperti dikatakan dalam salah satu lirik dari lirik lagunya Broery Marantika, seorang penyanyi Indonesia keturunan Ambon: “Memang lidah tak bertulang, tak terbatas kata-kata.”

#### 【編集者から】

イ・ワヤン・パスティカ先生は、バリのウダヤナ大学人文学部で31年間教鞭をとられ、大阪大学では2017年からインドネシア語専攻の学生を教えておられます。本論説で、両大学での経験をもとにインドネシア語を学ぶ学生たちの違いについて考察をされています。以下意識です。「インドネシアの学生は、最初は学習意欲も高いのですが、卒論を書くころには、次第に士気が落ちていきます。それは学生が問題に直面した時の指導者のモニター体制が充分ではないこと、卒論テーマ（インドネシア文学、インドネシア言語学、マレー文献学から選択する）の選択に当たり指導教官とのコミュニケーション不足、将来への不安などが原因です。なかでもインドネシア語の学位を取得しても、就職先が極めて少ないのが最大の障害となっております。一方、大阪大学の場合は最後まで勉学意欲も高く、卒業後は仕事があるという恵まれた環境です。女子学生の数が男子を上回っており、学習態度も女子がより熱心であるという点は、両国共通です。最後に大事なことは、大学は社会のニーズに応えられる質の高い学生を送り出すべきということです。そうすれば卒業後の進路もより開かれたものになるでしょう。学生諸君は知能と技能を磨いて、それを活かせる職場を求めべきです。いずれも“言うは易く、行は難し”です」。(M)

<sup>1</sup>[https://www.indexmundi.com/japan/demographics\\_profile.html](https://www.indexmundi.com/japan/demographics_profile.html)

<sup>2</sup> Faktor-faktor penyebab mereka memilih program studi ini tidak dikaji dalam kesempatan ini, walaupun kemungkinan sudah ada peneliti lain yang telah membahas hal tersebut.

## 大学卒業後のインドネシアとの係り

小川 秀洋 (1975 年卒)

大学時代と卒業後の 43 年間の大部分にインドネシアとの係りがあり、今も、ジェトロ新輸出大国パートナー(専門家)として、中堅・中小企業を支援、インドネシアを中心としたビジネスを開発する仕事に従事している。

(1) 退職後ジェトロ専門家として人材育成事業に係る期間は退職後の 2008 年から 2011 年、インドネシアの 7 州(北スマトラ州、リアウ州、ブンクルー州、中ジャワ州、NTB 州、北マルク州、北スラウェシ州)、成果目標は各州で選抜された商工会議所員の人材育成と OVOP (One Village One Product) 輸出品の発掘と制度構築を求められた。

一番の驚きは、すべての州でプリブミとの取組であったことである。会社員時代のカウンターパートはすべて華人であり、プリブミとの接点は、工業省・商業省・投資調整庁の大臣をはじめとする幹部、担当者しか経験なく、所謂、純粹のプリブミとの接点は初めてであった。

次の驚きは、経験したことが無い地域の人々と風景に接して、「ああ、これがインドネシアか」と振り返ったことである。ビジネスの多くがジャワ島で完結される時代に駐在しており、ジャカルタ・スラバヤ・スマラン・バンドン、島外ではメダン・メナド・マカッサルにしか出張した記憶がなく、特に、メナドからプロペラ機に乗りテルナテへ出向いた時の印象は特別だった。2000 年頃のハルマヘラでの宗教紛争が少し残っていたが、小さい事務所ながら商工会議所があり、ビジネスに係る人がおり、キャパビルを通してその地域に貢献できた時代が懐かしい。ブンクルー州もインドネシアの最貧州の一つと言われるが、商工会議所の職員の一生懸命に専門家の話を聞く姿勢が強烈であった。州都ブンクルー市はジャワ島の田園風景と何も変わらないが、ジャカルタへ出たい、海外へ出たい思いを持つ人材に出会い、キャパビルしたことが懐かしい。



(写真 上 : バリ州東隣の NTB 州の州都マタラムでの  
ショールーム開所式

右 : 北スマトラ州の州都メダンでの人材育成  
セミナー)



(神戸市の日本酒「福寿」にて友人ペディ氏と筆者(右))

(2) 華人ビジネスマンとの人脈

卒業後 40 年以上たつが、自分自身の財産は華人ビジネスマンとの人脈にある。特に駐在員時代の 10 年は、販売マーケティングと新設工場立ち上げの仕事が中心で、「売ると作るは華人」、「許認可がプリブミ」と言われた時代であり、華人ビジネスマンの人脈の凄さに驚いた。色々な業界の日本企業の駐在員、あらゆる業界に通じている華人ビジネスマンと接して、ビジネスは人の繋がりから成り立っていると実感したことが何回あったことか数えきれない。この経験と、築いてきた人脈が、今の仕事に大いに役立っていることは言うまでもなく、色々な業界の華人経営者との接点を持っている強みを活かした仕事をしている。

(3) 華人ビジネスマンは「信用する」と徹底的にその「人」を「信用する」

合弁パートナーを組んでいた華人経営者は日本が好きで、日本食・日本酒・ウイスキー・温泉・雪景色を求めて年に 2-3 回来られるが、ビジネスの合間に声をかけてくれ、美味しい食事とお酒をご一緒している。この 10 年、直接的なビジネスはないが、昔話と今の楽しみを語り合う。ペディ氏とは、日本への新婚旅行時に、2-3 日アテンドして以来、約 40 年以上の付き合いになる。一度「信用される」と、徹底的に「信用される」のが華人ビジネスマンの特長であるが、「信用」を得るまでの努力は欠かせない。

以上、現役の人の参考になればと願い投稿した次第である。





# インドネシアと私

佐々木 信子 (1967年卒)

会報誌「南十字星」の2007春第4号に「インドネシアと私」と題して、長崎西高卒業からインドネシア語学科入学、語劇、リレーカーニバルのための紅白旗、国際学友会で留学生に教えていただいた各地の民謡などについて書きました。

昨年大15回生は卒業50周年を迎えました。その記念のクラス会が年末に難波の月日亭であり、12人が出席。上八校舎の2階、モンゴル語学科の隣の教室で4年間共に学んだ21人のクラスです。11月に咲耶会東京支部総会の卒業50周年祝賀に出かけ、思いがけなく、今年5月末に公開されたアチェが舞台の映画「海を駆ける」の主人公を演じたディーン・フジオカさんのお父様（イスパニア語大12）とお会いできました。インドネシアつながりということで、ディーンさんのこともせつせとブログに書いていることをお伝えしました。

今年はまた日伊国交樹立60周年ということもあって、各地で様々な催しがあり。「インドネシアあれこれ情報」を掲げる当方のブログ「ガドガド」も連日記事を書くのに追われるくらいです。この原稿を書いている7月12日現在、7月のアチャラ・カレンダー（毎週木曜日更新）は54件、多い日には、6件のイベントが連なっています。在学時インドネシアの情報が入りにくかった世代には夢のようです。

いろいろな場所でインドネシア語学科の卒業生と出会う機会も多くあります。2008年の神田外語大学でのインドネシア語スピーチコンテスト、全くアウェイ状態だった福島亜里沙さんと西岡郁恵さんを応援できました。昨年のジャカルタでの独立記念日式典を伝える



昨年9月、恩師・イスマイル・ナジール先生の孫・Rouli Esther Pasaribu(Faridaさんの長女)にお会いしたときの様子

Antaraの記事に岡田麻生子さん、吉野真輝さんの名前を見つけてはブログに書き、すぐに原真由子先生にメールでお知らせしました。後日東京のインドネシア大使館でMuhadjir Effendy教育文化大臣の講話があったときには岡田さんも招かれ、みごとなインドネシア語のスピーチをなさいました。もちろん「先輩ですよ」と話しかけました。

また神戸インドネシア語学習会の沖政夫さん(大14)から「最新インドネシア語小辞典」の注文メールを受けたときは卒業以来でしたからびっくりしました。最近では日伊60周年記念特設サイトで、内原正司さん(大12)の「インドネシアに生きる一元商社マンは樂觀主義者 付かず離れず46年」を興味深く拝見しました。

昨年9月には、恩師・イスマイル・ナジール先生の孫・Rouli Esther Pasaribu(Faridaさんの長女)にもお会いすることができました。大阪大学で円地文子で博士号を取得、現在はインドネシア大学人文学部日本学科で教鞭をとっています。大宅壮一文庫に資料収集に通う多忙な日程の中でした。

最後はやはりブログで閉じようと思います。カテゴリーでは「インドネシアの映画」が一番多く、2005年1月開設から現在まで3413項目の記事を書いています。そして楽しみは映画祭で来日する監督・俳優とお話することです。東京国際映画祭、東京フィルメックスだけでなく、時には3月の大阪アジア映画祭、9月の大阪総領事館主催のインドネシア映画祭にも足を伸ばしています。その時は、佐々木ではなくIbu Gado-Gadoという名前が出ています。exblog ガドガド：<https://gadogado.exblog.jp/> をご笑覧ください。



インドネシア語劇 (1964年)

## ツアーガイドを目指して

佐伯 和夫 (1973 年卒)

6月2日19時30分日下部観光のバスで成田空港第一ターミナル南ウイングへ向かっている。後30分ほどで空港に到着予定。先月27日の空港出迎えに始まったトルコ自動車部品工業会の25名の視察団と、もうすぐお別れだ。最後に歌を唄ってお別れしようと思ひ江利チエミの「ウシュクダラ」を日本語の歌詞で唄ったところ、皆が一斉にその歌をトルコ語で唄ってくれた。東京スカイツリー、浅草に始まり、中日には、マツダ工場見学と原爆ドームを観に広島へ行き、最終日の今朝は名古屋を新幹線でスタート、お昼は丸の内ビルの寿司屋で美味しい寿司を御馳走になり、その後、皇居東御苑から二重橋まで歩き、最後は原宿竹下通りで、もみくちゃになりながら買い物のお手伝いをし、明治神宮参拝。今回のツアーガイド中思い出深いがありました。それは新幹線の中で一人の女性に折り鶴を教えたところ翌日他の女性からも折り鶴を教えてほしいとの要望があり、作り方と折り紙を渡したところその翌日に、彼女が初めて折ったという赤い鶴をフレームに入れ We love you と言いながらプレゼントしてくれたことです(右上の写真)。

今年は4月に、UAEからの二人の男性を、秘湯のある板取の旅館宿泊に始まり、郡上、関、美濃、瀬戸を案内、居合、手すき和紙作り、作陶まで5日間楽しんでもらいました。5月には、タイのご家族6人を、高山、金沢、富山、松本、富士と車で巡る4日間の旅のお供をしました。後になってみるといずれのツアーも後悔することばかりでありましたがゲストの言葉に救われ思い出深い旅となりました。

ツアーガイドを目指すきっかけは勤続30年の褒美として会社から2週間の休暇と30万円を頂きスイスのツアーに参加、その旅でお世話になったツアーガイドの仕事ぶりを見て退職後はツアーガイドをやりたいと思ったことでした。60歳で退職後、英語通訳案内士



の資格取得のため英語、日本史、地理の勉強を開始、四度目の受験でやっと合格。その間、犬山城や COP10、ESD ユネスコ世界会議などで英語通訳ボランティアガイドをして英語を使う機会を得ました。またパートで、三菱重工小牧南工場で MRJ 組立てパートナーのエスコートやトヨタグループ会社の海外工場からの研修生の現場での通訳業務も行いました。そして一昨年の4月にツアーガイドとしてデビュー、米国からのご家族の京都ガイドを務めました。ゲストからクレームを受け途中で交代させられる羽目となりました。お陰で予定していた芸妓舞妓ディナーには出れずじまい。その後は地元で、馬籠妻籠の日帰りツアーや名古屋市内観光ツアーなどを担当してきました。そんな毎日の仕事をする中で先輩の紹介により昨年11月に中規模のツアーガイド派遣会社に登録することができました。最初の仕事はインドからのお客様の空港出迎えでした。

ツアーガイドはアサインされてからその下見や勉強など準備は大変ですが外国からの観光客と接する時の楽しさは格別です。また今まで知らなかった日本のいい所、素晴らしさに気づかされることも多々ありツアーガイドになることができ良かったと思っています。ご参考までに4月から5月の3組のゲストの合計16日間の給与は40万円。今秋には名古屋港へ入るクルーズ船のツアーガイド業務が予定されており目下お客様に喜んでもらえるようさらに英語のブラッシュアップの毎日です。

(左：上高地大正池にて。中央が筆者)



## 外語女子 ～再会と新しい出会いと～

須田 <sup>むつみ</sup> 和 (1979年卒)

1975年に入学のインドネシア語学科20名のうち、女子は8名で、当時、インドネシア語では過去最多といわれた女性割合でした。その後1名が転学されましたが、現在、交流が復活したのは4名、東京在住の順子さん、大阪のまつ子さん、福岡の史子さん、そして兵庫の私です。



(2016年 京都にて、左から二人目が筆者)

大学当時の呼び名での会話、話題がつきることがありません。上八学舎最後の卒業生でしたが、古く、暑い、寒いが非常に厳しかった校舎、地下の生協食堂では、うどん50円、親子丼80円、Aランチ200円という安さ。留学生別科のインドネシア人との交友、駅から学校までの通学路で男子は雀荘に消えていった、MJBやVIPという喫茶店、インドネシアの専門書を買いに、梅田の書店にいっしょに行ったこと、家庭教師や国際見本市でのアルバイト、4年制大卒女子には非常に厳しかった就職戦線の思い出、そして、恩師の磯浦美恵子先生から、卒業前の最終授業の時に、「主婦・妻という職業はありませんよ。あるとしても、大統領夫人か首相夫人くらい。しっかりと自分の名前ので仕事ができる職業を持って」というメッセージをいただいたこと。子育てなど家庭と仕事とで多忙を極め、余裕がなく、疎遠になった時期もありましたし、これからは、自分の加齢によって、会いにくくなる時期も来るかもしれませんが、外大インドネシア語で学んだからこそ得ることができた、大切な、“一生もの”の友人です。

また、外大女子・既卒者も含む10名が暮らしていた、東成区深江南の「シロシマ下宿」では、入学時からタイ語科の友人、直子さんとすっかり仲良くなりました。入学当時、どちらもホームシックになった、いっしょに銭湯通い、いっしょに自炊し、またデートで門限破りの時のアリバイ作りに加担したり、3回生の終わりに、カリフォルニア州で、短い留学とホームステイをしたり。同じ頃に失恋もし、郷里の北九州で教師となった彼女、大阪で商社勤務をした私でしたが、お互いの結婚式ではスピーチをし、十数年後、なぜかどちらも離婚して…(笑)

そして、インドネシア語の私たちが、交流を深めているのに刺激され、直子さんも同窓会名簿から、タイ語科同級生と連絡をとり、2016年、卒業以来初めての女子同窓会を開かれました。そこに、インドネシア語の私たち4名も参加して、10名で語り合った京都での会食も、非常に有意義で、思い出に残るものとなりました。



(京都にて、須田の自撮り写真です)

そして、今年8月、咲耶会神戸支部の女子会、KBWS←(神戸美人の会だそうですが?)に、初めて参加しました。イタリア人がオーナーシェフの有名店で、英語、ドイツ語、イタリア語、デンマーク語、ペルシャ語、ヒンディー語、インドネシア語科卒の40歳代から70歳代(にはとっても見えませんが!)の外語女子9名が集まりました。幹事を引き受けてくださるお二人のおかげで、月1回のペースで、ランチ会や夜会が大阪から神戸で開かれているそうで楽しみが増えました。



(尼崎市にて)

ここにあげた皆様の、およそ8割が商社・貿易会社勤務経験があります。次に多いのが教職。また学生時代に、学んでいる言葉の国に行った人は意外と少なく、2割程度でした。卒業後、かなりの長い時間が経過した後に、こうして、外大の同級生と再会し、また、先輩や後輩に「初めまして」とお知り合いになって話ができることは、ほんとうに、ありがたく幸せなことです。外語女子、もちろん男子も、これからもっと交流できるように、機会をつくる役もしたいと思っています。

《留学生からの特別寄稿》

## Bahasa, Passport Kasat Mata

大阪大学大学院博士前期課程2年

Dwi Puspitosari

Anda gemar jalan-jalan ke luar negeri? Maka Anda tidak akan asing lagi dengan yang namanya “passport”, buku kecil ukuran saku yang wajib Anda miliki saat Anda ingin mengunjungi suatu negara di luar negara yang Anda tinggali. Tanpa “passport” tersebut, Anda tidak akanizinkan masuk.

Berbicara mengenai pergi mengunjungi negara lain, sekarang saya sedang berada di Jepang, bukan untuk berwisata, melainkan untuk kuliah jenjang S2 di jurusan Bahasa dan Budaya Jepang, universitas Osaka. Banyak pelajar asing yang saya temui selama ini, menganggap masyarakat Jepang masih tertutup dan menjaga jarak, terutama dengan orang asing. Saya yang semenjak 2015 April lalu tinggal di Osaka, merasakan hal yang sama. Terlebih mungkin karena penampilan saya sebagai seorang muslim, dimana saya selalu mengenakan hijab dan memakai pakaian dan bawahan panjang.

Semenjak resmi menjadi mahasiswa jenjang *master*, selama tiga semester ini saya dipercaya oleh Ibu Yumi Sugahara untuk menjadi TA (*teacher assistant*) di kelas jurusan Bahasa Indonesia tingkat pertama. Di kelas beliau, saya melihat sesuatu yang selama ini belum pernah saya temui. Saya melihat para mahasiswa yang sedang berusaha “mencetak *passport*” nya masing-masing. Apa maksudnya? Di kelas bahasa Indonesia, saya sadar, mereka bersusah-payah belajar bahasa Indonesia, bukan hanya sekedar untuk mendapatkan nilai yang bagus pada setiap ujian di kelas, melainkan jauh dari itu, mereka ingin berteman dengan kami, penutur asli bahasa Indonesia. Mereka ingin masuk ke area para pelajar Indonesia, ingin membuat ikatan yang disebut “pertemanan”, dan mereka tahu, syarat pertama untuk bisa masuk ke area kami adalah “*passport* kasat mata”, yakni bahasa Indonesia. Dengan mampu berbahasa Indonesia, mereka merasa akan bisa menghapuskan jarak serta tembok pemisah antara kami. Dengan bahasa Indonesia mereka bisa mulai selangkah mengawali pertalian yang dekat dan akrab. Dengan bahasa Indonesia, mereka berharap tidak akan ada

“*uchi* (ウチ) “ dan “*soto* (ソト) ”.



Bagi para pelajar bahasa asing, bahasa layaknya *passport* kasat mata yang harus dimiliki untuk bisa masuk, diterima dan menjadi bagian dari suatu masyarakat. Sama halnya dengan para pelajar Jepang jurusan bahasa Indonesia tersebut, saya pun menganggap bahasa Jepang saya adalah *passport* bagi saya untuk bisa diterima di masyarakat Jepang, meski dengan penampilan saya yang mungkin beberapa orang menganggap tidak biasa. Bahkan satu *passport* ini akan saya gunakan tidak hanya sebagai penerimaan dan menjalin “pertemanan” saja, melainkan *passport* ini akan saya jadikan agen, untuk saya mengenalkan betapa menyenangkan dan uniknya bahasa Indonesia, serta betapa kaya dan beragamnya budaya negeri Indonesia. Kepada masyarakat Jepang yang telah dengan baik menerima saya selama ini, dengan perantara *passport* ini, saya berharap bahasa dan budaya Indonesia mampu diterima dan dikenal luas di negeri Sakura. Dari saya, seorang pelajar Indonesia yang masih tetap berupaya menambah lembaran halaman *passport* kasat mata.



(インドネシアフェスティバルで、アングロンを演奏する筆者一右から3人目)



## 関東支部総会

支部長 辻本 雅洋(1975年卒)

2018年6月9日東京住友クラブにて南十字星会関東支部の総会を開催しました。当日は快晴に恵まれたこともあり24名という多数の方にご出席いただくこととなりました。終始和やかな雰囲気の中で楽しい会となりました。

宮崎会長から、かねてからの課題であるインドネシア語の定員問題、2021年の大阪外大100周年記念の募金活動などについての報告がありました。後者については、卒業生皆様の協賛のお願いに併せて、南十字星会も組織として応援していくことの必要性を表明されました。関東支部も呼応して対応していくことを支部長として約束いたします。

出席者多数の方から近況等ご報告いただきました。まずは今年から幹事として私と一緒に関東支部の運営をサポートして頂くこととなりました。S52年卒大角さんをご挨拶されました。その中で今後、会の更なる発展を目指して、皆様のサポートを得ながらも女性・若手の参加推進を図っていく旨を表明されました。また、今回はジャカルタ支部から一時帰国中のS50年卒丹羽さんが参加して下さり、インドネシアの現状を生々しくご報告されました。丹羽さん本当に有り難うございました。

これからも同窓会組織の活性化に向けて幹事一同頑張っ  
て参りますので、卒業生の皆様には老若男女問わず本部も  
しくは支部に氏名、連絡先のご登録を是非ともお願いします。



## ひとこと

(敬称略)

磯田良一 (55卒) =埼玉県さいたま市

現役として毎日元気に働いています。近くのプールで、週2  
~3回続けております。

山口 寛 (58卒) =大阪府枚方市

“老いてなお、初心忘るべからず”の心境で、南十字星会報  
誌の購読を楽しみにしております。

西田達雄 (60卒) =東京都調布市

国立大学唯一の大阪大学外国語学部なれど、そのインドネシ  
ア語専攻枠は寂しい限り。現下の日本・インドネシア関係維  
持発展に向けて大学当局の大英断を期待したい。

林喜久雄 (60卒) =神戸市

40~60才台の頃にはとてつもない年寄りだと思っていたが、  
今年4月ついに80才!カミさん共々元気。10月29~30日、  
上八校舎跡「大阪交流センターホテル」で開催予定の「サウ  
ダラ会」(同期の同窓会)に出席予定。楽しみにしています。

道広健吾 (61卒) =東京都大田区

このところ体調あちこち不調続きで医者のお世話になっ  
ており、体重も3年前に比べ15kgダウン。でも何とか健康寿  
命で長生きしたいと思っております。

堀田 実 (63卒) =千葉県船橋市

長期にわたり帯状疱疹に悩まされ、昨年秋には白内障の手術  
を受ける羽目になり、健康な日が少ない一年になりそうです。

永田 悠 (65卒) =大阪府豊中市

「南十字星」24号、楽しく拝見しました。

朝倉俊雄 (67卒) =神奈川県横浜市

2017年に家内と二人でオランダ在住の旧友を訪ね、その後東  
欧3か国を初めて鉄道旅行してきました。アムステルダムの  
国立美術館で若き日のスカルノの独立宣言を聞くことがで  
きました。旅はいいですね。

丹羽慎吾 (75卒) =ジャカルタ駐在

会報(24号)への掲載有難うございました。インドネシア  
ライフ、エンジョイしています。

藤井眞澄 (78卒) =愛知県瀬戸市

今年7月から経済連携協定(EPA)で来日したインドネシアの  
人達に、豊田市の研修所で日本語会話のボランティアを始め  
ました。楽しくやっています。

平岡 毅 (94卒) =滋賀県大津市

大島先輩の訃報が大変ショックでした。本当に心やさしい方  
で、ジャカルタ駐在時には大変お世話になりました。

## ◆お悔やみ申し上げます◆

昨年9月以降下記の方々の訃報が届きました。

森本悦次 (45卒) =札幌市

長谷泰行 (50卒) =大阪府箕面市

藪中芳夫 (63卒) =東京都狛江市

# 「協賛金」ありがとうございました

郵便振込 あて先「南十字星会」  
口座 00900-9-278638 用紙を同封

◎ご協賛いただいたみなさま◎ (敬称略、西暦卒順 2017年8月21日～2018年8月20日到着分)

- |         |          |          |         |          |          |         |          |         |
|---------|----------|----------|---------|----------|----------|---------|----------|---------|
| 44 浜田広一 | 58 寺嶋正直  | 61 田中政義  | 64 内原正司 | 65 森岡義典  | 70 長尾善伸  | 76 廣澤義幸 | 86 西川まさき | 07 高田芳博 |
| 47 波部 清 | 58 中村 徹  | 61 道広健吾  | 64 小杉 功 | 65 横田義明  | 71 竹沢寿広  | 78 藤井眞澄 | 91 鴨川紀代  | 09 遠野友美 |
| 55 池田英彦 | 58 山口 寛  | 62 石川恵二  | 64 小西新平 | 66 扇谷竹美  | 71 野崎淳一  | 79 尾内康彦 | 91 松下聖次  |         |
| 55 石井義人 | 59 丹羽宏造  | 62 高野郁男  | 64 澤井佳一 | 66 鈴木安夫  | 72 塩見 澄  | 79 大野 泉 | 93 諏訪本聡  |         |
| 55 磯田良一 | 60 喜多山寛爾 | 62 松木 優  | 64 渡辺重視 | 67 朝倉俊雄  | 73 今村政幸  | 80 片山信英 | 94 竹前望美  |         |
| 56 島崎忠彦 | 60 滝本佳一  | 63 大田中実  | 65 有井 晟 | 67 佐々木信子 | 74 阿部直子  | 80 澤井千尋 | 94 平岡 毅  |         |
| 56 西尾昭雄 | 60 西田達雄  | 63 中川昌衛  | 65 近藤 勲 | 68 広瀬加代子 | 75 小川秀洋  | 80 松本雅子 | 95 沖中弘和  |         |
| 56 榎谷昌博 | 60 林喜久雄  | 63 堀田 実  | 65 永田 悠 | 69 川島 巖  | 75 勝原紀美代 | 81 下野正一 | 95 坂元 祐  |         |
| 57 西 俊彦 | 61 岩井俊之  | 63 前田比佐夫 | 65 松下全克 | 69 中澤忠男  | 75 辻本雅洋  | 81 道幸静児 | 02 里 真吾  |         |
| 58 河上宗弘 | 61 木下 一  | 64 岩谷英志  | 65 宮崎衛夫 | 69 本田正伸  | 75 丹羽慎吾  | 85 清島健朗 | 05 西野めぐみ |         |

南十字星会は、「協賛金」によって、運営しています。一口2千円、何口でも結構です。振込用紙の通信欄を利用し、近況をお知らせください。

会報の発送後、転居先不明で戻ってくるケースが増えております。転勤やご結婚などに伴い、住所変更された場合は、お知らせいただきますようお願いいたします。

## ご報告

会長 宮崎 衛夫 (1965年卒)

大阪外国語大学が大阪大学と統合し早や11年になります。統合時にインドネシア語専攻の定員が10名と大幅減員となっておりますが、2019年度より2名増員となりました。これは私達が目指す状況とはほど遠く、同窓会組織として根気よくさらなる増員のお願いを続けていく所存です。皆さまのご理解とご支援をお願いする次第です。

ところで、今年は隔年に開催している南十字星会総会を下記の要領で開催いたします。旧交を温め、新しい仲間との交流の良い機会ですので、奮ってのご参加をお願いします。

## 2018年度「南十字星会総会」へのお誘い

隔年に集う南十字星会本部総会を下記の通り開催いたします。同窓生との出会い、交流の場として、また同期のクラス会も兼ね、皆さんお誘い合わせのうえ奮ってご参加ください。お待ち申し上げます。

### 記

日 時 : 2018年11月17日(土)

受 付 : 午前11:30～

開 宴 : 12:00

場 所 : 大阪大学中之島センター 9階 交流サロン  
(大阪市北区中之島4-3-53 : TEL06-6444-5214)

会 費 : 5,000円

※ご出席の確認は、準備の都合上11月5日までをお願いいたします。

本会報に同封のはがきをご利用ください。



京阪中之島線中之島駅より徒歩5分  
地下鉄四つ橋線肥後橋駅より徒歩10分  
地下鉄御堂筋線淀屋橋駅より徒歩16分

## 南十字星会 会報会計報告

(2017年8月21日～2018年8月20日)

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
1) 前期繰越金	¥333,279	1) 会報(第24号)制作費	¥271,764 (175,176)
2) 協賛金 (17.8.21～18.8.20着分)	¥311,000	送付料	(91,157)
		事務用品他	(5,431)
		2) 振替手数料他	¥9,706
		3) 次期繰越金	¥362,809
合 計	¥644,279	合 計	¥644,279

(注) 内藤基金残高¥408,408

2018年8月20日

南十字星会会長 宮崎 衛夫

## 編集後記

本号は11名の方から投稿をいただき、新しい編集体制で作成しました。これまでの幅広い経験談、思い出話、そして現在の活動状況などに加えキャンパス使いも、皆さまにも興味深く読んでいただけるものと思います。パスティカ先生と留学生からの貴重な寄稿文は、しばらくインドネシア語から離れている方にもぜひ目を通していただきたいものです。ご投稿いただいた皆さま、有難うございました。(M)